

子どもから大人まで親しまれているアニメに「サザエさん」がある。令和の時代に入り2か月が経とうとしているが、昭和、平成、令和と3つの時代親しまれ、今や日本の代表的アニメの一つである。サザエさんの著者である、長谷川町子さんはクリスチャンであるが、サザエさんの中には、聖書に描かれている人間の本質をみることができよう。エピソードの一つを挙げると、フネさんが化粧水をつけているのを見た夫の波平さんが、「手遅れだ」と言いその後、1本しか生えていない自分の頭に育毛剤をつけているというもの。客観的にみたら、手遅れなのは波平さんの方である。

マタイ7:3「あなたは兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。」

聖書には人間の盲目さ、自己中心的な人間の姿がはっきりと示されている。自分の目の中にある丸太に気づかないで、他人のおが屑を指摘する人間の姿は決して誇張された話ではないのである。マタイ18:21-35「仲間を許さない家来」1万タラントンの借金を帳消しにしてもらった家来が、自分に百デナリオンの借金をした家来を許さないたとえや、マタイ20:1-16「ぶどう園の労働者」では、自分は朝9時から労働している者として読む。いつも自分は都合のよい方において、他の人を見るのである。私たちの基準はどこまでも、自分である。それが人間の姿である。

さて、サザエさんの登場人物には海にちなんだ名前が付けられているが、今日の聖書はマルコ1:16-20「4人の漁師を弟子」にする場面はガリラヤ湖のほとりの出来事である。マルコは、最初の弟子の場面も、非常に端的（シンブル）に描いている。ルカによる福音書は、イエス様の言う通り沖に出て網を下ろしたら大量の魚が取れたエピソードが書かれているが、マルコとマタイは神様の呼びかけとそこにすぐに従った弟子たちの行動が描かれているのみである。イエス様は、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられた。すると、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのをご覧になった。（16節）シモンは後に教会のリーダーとなるペトロのことである。ペトロと兄弟

のアンデレは漁師として生活をしてきた。その様子をイエス様はご覧になり、彼らに向かって「わたしについてきなさい。人間をとる漁師にしよう」と声をかけるのである。二人はすぐ網を捨てて従った。これがイエス様とペトロとアンデレの最初の弟子となった出来事である。そして、少し進んで行くと、今度はゼベダイの子ヤコブとその兄弟のヨハネに遭う。イエス様は彼らをご覧になると、すぐに彼ら呼び寄せ、ヤコブとヨハネは父ゼベダイを雇人たちと一緒に船に残して、イエス様の後について行った。普通、弟子になるには、弟子の方から先生をお願いをして「弟子入り」する。しかし、イエス様と弟子の関係は逆である。「召命」という言葉があるように、神様からの呼びかけ (Calling) に応答することで弟子になるのである。「あなたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたを選んだ。」(ヨハネ 15 : 16) 物事の出発は私たちからではない。すべて神様からあることに、まず気づくことが必要である。すべての主導権はキリストにあるのである。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちに愛して、私たちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました (ヨハネ手紙 4 : 10)」。私たちが愛するのも、赦すことも、私がスタートではない。私たちは既にその恩恵に預かったものとして、今度はあなたがそうしなさいと勧めているのである。私たちが愛することも、赦すことも、すでに受けたものだからできるのである。

最初の弟子となったペトロとアンデレ、ヤコブとヨハネについては漁師であったという情報しかない。仕事をしている彼らを見て、イエスは彼らに声をかける。彼らが漁の腕がいいから、効率的な仕事をしているから、伝道に役立つ賜物をもっているから、彼らを選んだのではない。漁師という仕事は、その当時、他の人々からあまりよく思われていた職業ではなかったようである。私たちが見るものは、その人が持っているものである。どんな仕事をしているのか、どんな賜物があるのか、どんな技術をもち、どんな特技があるのか、長所は何かということである。しかし、イエス様をご覧になったのは、ペトロ、アンデレという存在である。どんな人生を歩んできたのか。どんな悩みをもっているのか。どんなことに心配し、どんなことに絶望を抱えているのか。

イエス様は、ご自身の働きに役立つ人を選び出しているのではない。イエス様は神様であり完全な方であるから、

その必要はないのである。彼らも持っている賜物を活かすが、それが目的ではない。なぜなら、彼らは大事な仕事道具の「網を捨てて従った」のである。イエス様の後についていくのに、何か持ってきたのでもない。

何か修行をして合格したからではない。着の身、着のままイエス様についていった。だから、イエス様の呼びかけに「すぐに」応答できたのである。自分がより頼んでいたものを今、手放しイエス様の後に従った。

自分の目の中の丸太に気づいたときの衝撃がどれほど大きいものであろうか。きっと、人生が変わるであろう。丸太が取れた視界に広がるのは別の世界のように見えるはずである。そもそも、私たちは自分の目の丸太に気づかず、相手の目のおが肩を批判している人間である。そんな私たちが、自分で丸太を取り除くことができるであろうか。

取り除く以前に丸太に気づかなければならない。しかし、これが大変なのである。私たちは自分ではそれに気づくことが出来ないのである。「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る（ヨハネ9：41）」。見えていなかったことが問題ではない、見えていないのに、見えると言っていることが問題なのである。

さらに、「この民は口先ではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間の戒めを教えとして教え、むなしくわたしをあがめている。」（マルコ7：7）口では神様を敬っているようでも、心は違う。

悔い改めがどれほど、難しいことか。その丸太が大きければ大きいほど、逆にそれに気づくことが難しいのである。

イエス様は伝道の初め、このように言われた。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」

イエス様の後についていく人生とは「悔い改めて福音を信じる」歩みである。

「福音」とはマルコ1：1に「神の子イエス・キリストの福音の初め」と書かれている。神の子イエス・キリストご自身である。神の子イエス・キリストご自身が良き知らせそのものである。つまり、言い換えると「悔い改めて、神の子イエス・キリストを信じなさい。」これがイエス様の後についていく人生である。

しかし、わたしたちはただ、盲目的に従うのではない。そこには約束がある。17節「わたしについて来なさい。人

間をとる漁師にしよう。」「わたしがあなたを人間をとる漁師にします」という約束である。

ペトロとアンデレが自分たちで頑張っ、人をとる漁師になるのではない。神様が、彼らを人をとる漁師へと作り変えていくのである。漁師ではなく、神様の働きを手伝う弟子としての働きである。

「私の後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って私に従いなさい。」(8:34)

この勧めにも約束がある。「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。」(8:35) そして、「神の御心を行って約束されたものを受けるためには、忍耐が必要です。」(ヘブライ 10:36) 忍耐には信仰が必要である。これは私たちの努力の信仰ではない。神様が御心のまに、私たちをふさわしい者へと変えてくださる。それは、魔法をかけて、一瞬にして変身するような変化ではない。そのままの自分が、イエス様の呼びかけに、着の身着のままの状態であみながら、イエス様のされる事柄を見て、聞いて、信じる歩みを通して変えられていくのである。イエス様の後に従ったペトロとアンデレ、ヤコブとヨハネが見た光景はどのようなものだったのであろうか。それは、人々の病を癒し、悪霊を追い出し、大勢の群衆に食事を与えたイエス様がされた数多くの奇跡であった。神の国についてもたくさんのたとえを用いて教えてもらった。時に、嵐の中で死ぬかもしれない経験をした。しかし、その嵐をイエス様が鎮められたが、弟子たちは「風や湖までも従わせてしまうこの方は、いったいどなたなのだろう」と言ってしまふ。また、神の国を教えてもらいながらも、弟子同士で「誰が一番偉いか」と頓珍漢な質問をしたりする次第であり。福音書を読むと、むしろ、弟子たちの無理解や不信仰の出来事が多く書かれている。イエス様と一緒に生活していた弟子たちでさえ、そうなのである。それでも、イエス様は愛をもって彼らに教え一緒に歩まれた。彼らはイエス様のされたことを見て、聞いて、信じて、経験して、神様によって変えられていったのである。

最後に、ある親子のお話をして紹介したいと思う。

『父が亡くなる少し前に、私たちが一緒にソファーに座っていると、突然鳩が窓辺に止まりました。父は私に「あ

れは何だ？」と聞くので私は「鳩だよ」と答えました。2、3分後、父は私にもう一度「あれは何だ？」と聞いてきたので、私は「お父さん、今言ったじゃない。鳩だよ」と言いました。少し経つと、父は私にまた「あれは何だ？」と尋ねました。私は我慢できなくなり、大きな声で「鳩だよ、鳩！」と言いました。私は父にひどいことをしていると分かっていたのですが、父の世話をすることに疲れてきてしまいました。父はどこに物を置いたのか忘れ、時々同じ質問を何度も何度も聞いてきました。時には私の名前さえ思い出せないこともありました。毎日、私は父が食事をしたか、着替えをしたか、お風呂に入ったか確認しなければなりませんでした。

—父の葬儀の後、私は父の部屋を片付けていると、古い日記を見つけました。すると、こう書いてあるページを見つけました。「今日、今3歳の息子が私と一緒にソファに座っていたところ、鳩が窓辺に止まっていた。息子は私にそれが何か、20回は聞いてきたに違いない、そして毎回私は息子にそれは鳩だよと答えた。聞かれるたびに、私は彼をぎゅっと抱きしめた。説明するのは難しいが、聞かれるたびに、私は息子にますます愛情を感じた。』

世の中が教えてくれるのは、認知症というものはどういうものか。いかにストレスなく認知症の父親と過ごすことができるかである。私たちが、自分で何かやっているとしか見えていないなら、本質をみることができない。私たちが最初ではない。私たちは既に、いただいていた者だったのである。そのことに気づくと、隠されていた真実、愛が見えてくる。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう。」弟子たちがイエス様と共に歩んで、最後に見た奇跡は十字架の死であった。ただ、その時でさえも、彼らはイエス様のことがまだ完全にはわからなかった。

そして復活されたイエス様に遭い、聖霊をいただいた。自分たちが大切にしてきた律法、あのモーセに律法を与えた全能なる方が、自分たちと共に歩まれたイエス様だったと知った時の彼らの衝撃と驚きはどれほどだったであろうか。全能なる方であり、多くのために病を癒し、時には死者を復活させられた方が、その全能なる方が十字架にかけられ死なれた本当の意味を知ったときの驚きは計り知れない。もう、彼らの目の丸太はない。

私たちの目が開かれるのは、神の子イエス・キリストが誰か知ることによってである。まず自分の目から丸太を取

り除け。そうすば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる（マタイ7:5)」。

「わたしについてきなさい。私があなたを人間をとる漁師にする」。全能なる愛の神様を知る人生であり、神の子イエス・キリストを信じる人生である。それは、私たちの目の中にある大きな丸太に気づかせてくださり、変えてくださる歩みである。そして、十字架の死に至るまで私達を愛された神様の愛を知る人生である。この神様の約束の招きに答えていきたいのである。